# 第二話「悩み事、他人事、秘め事」

放課後の保健室は静かだった。扉には「除菌中」という貼り紙がしてあるが、これは人払いのための嘘だ。人のいない保健室はときどき生徒たちの密会の場になることがあるから、こうして貼り紙をしている。

といっても、果して効果があるのかは疑わしい。現についさっき、彰と美弥は忍びこんでいた生徒に出くわした。「除菌中」の扉から中に入ると物音がして、ベッドの白いカーテンの陰から、男女の生徒ふたりがあわてたようすで出てきたのだ。

衣服はあまり乱れていないし、シャツもはだけたふうには見えない。が、かなり焦っていたらしい。男女は気まずそうにうつむき、それぞれ手に外履きをぶらさげて、彰と美弥の脇を小走りに通り過ぎた。

そのとき、彰はきょとんとしてそれを見送った。すーっと風の流れてくるのを感じて、窓の方を見る。窓は全開になっていた。

保健室は校舎の一階にあり、窓は裏庭へ行く途中の小道に面している。男女の生徒はここをくぐって外から入ったのだろう。

「あいつら、わざわざ靴まで持ってきたのか……鍵あいてるのに」

「貼り紙に騙されたんだろうね。ゆうちゃん先生の狙い通りかな？」
「結局入られてちゃ世話ないよ。本人いないみたいだし」
「ふふふ、そうだね」
　と美弥が窓を閉めながら言う。ゆうちゃん先生とは養護教諭の河野優子であり、このたび彰と美弥に物品の整理を命じた三十前の女だ。優子という名前とは少し印象の違う知的な美人で、生徒からは割と好かれている。が、最近はどうも忙しいらしく、部屋にいないことが多い。
　手伝いを言いつけた本人がいないというのはどうなのか、と彰は思った。
「あの人はあちこち適当なんだよな……」
「まあ、どの生徒に対してもそうだからね。でもちゃんとしないと後がこわいし」
「確かに。……じゃ、始めるか」
「はーい」
　そうして保健委員のふたりは作業をはじめたのだった。
　彰は朝のぶんを挽回しようと張り切るものの、しばしば整理の途中で美弥に頼ることがあった。
「高橋さん、これどこ？」

「それはー……ここかな。そう。三つ折りで」
「これは？」
「その棚の一番下。ラベルが見えるように置いてね」
　考えてみれば、彼はあまりきちんと保健委員の活動をやってこなかった。入学した去年の前期に一度やったことがあるきりで、今年はほとんどはじめてだ。なんとも頼りない話だけれど、その点はずっと去年からずっと保健委員をしている美弥とは違う。考えてみればこれだけの量の整理を美弥とするのははじめてだ。彼女は慣れた手つきで物品を整理している。彼もそれなりに役に立ってはいるものの、作業はやはりこちらの方が速い。
　彰は去年もそうだが、部活と委員の活動が重なったときはだいたい部活に出ていた。また、この数週間というもの、彼は玲奈とのセックスのことばかり悩んでいて、他のことはほとんど気にかけなかった。
（……これからはこっちもちゃんとやるようにしよう……）
　申し訳なさを感じて黙々と手を動かす。自分とは反対に、手際よく仕事を片づけてゆく美弥の姿をちらちらと横目に見ながら。彰にはなんとなく彼女の白い手の動きが目についた。その柔らかい手は薬品の入ったボトルに巻きついたり、ガーゼの端をなぞったりしている。
　彰はふと、その手を握ったらどんな感触がするだろうかと考えた。考えて、次の瞬間に

はそれを打ち消した。いやいや、俺はいったい何を考えているのか、と。美弥に恋人がいるという話は聞いたことがないけれど、自分には玲奈がいるではないか。そう思って、彼は邪念を振り払うように作業に没頭した。

三十分ほどすると、美弥が休憩にしようと言った。彰の方では言い出しづらかったから、これは助かる。

「はー……」

「大友くん、スポーツドリンクあるよ。先生が置いてったみたい」

「お、ありがとう」

保健室には入口の「除菌中」と同じく、黒のマーカーの細長い筆跡で書かれた「差し入れ」の段ボール箱があった。勝手に取れ、ということなのだろう。箱はすでに開けられていて、なかに詰まったスポーツドリンクのペットボトルが何本かなくなっている。

今、そこからまた二本が美弥の手で引き抜かれた。女子の細い手が、男子のやや武骨な手にペットボトルを渡す。

「もうさあ、生徒にやらせる量じゃないよこれは」

「そうだねーまだかかるね。まあ、それでいいんだけど……」

「え？」

「ん、なんでもない」
まだ外は明るいが、夕日が差しつつあった。彰はベッドの端に座り、壁の隅の大きな段ボール箱の山を恨めしく見つめていた。
すると、美弥もまた同じベッドの同じ側に座ってきた。
彰は内心すこし驚いたものの、べつに近い距離でもないから気にしないことにする。「わたしも疲れちゃってさあ」と、ベッドに座った美弥が足を伸ばす。おとなしい印象の割には短いスカートの端から、白い膝と太ももがちらっと見える。
ふたりは休憩がてらにしばらく雑談をした。もともと同じクラス、同じ委員でそれなりに話していたから、話題がなくて気まずくなることはない。それどころか、彰は美弥と話すのがなんとなく心地よかった。ぽつぽつと小さなふたつの話し声と笑い声が、静かな保健室のなかで交される。
やがて美弥が「そういえばさあ」と言う。さあ、と言った後にやや沈黙があったので、彰は彼女の方に顔を向けた。美弥は同じベッドの右隣にやや離れて座っている。彼がその顔を見ると、彼女はじっと見つめ返してくる。
「何？　高橋さん」
「大友くんってここんとこずーっと疲れてる、っていうか悩んでる感じに見えるんだけど。

何かあったの？　寝不足ってだけ？」
彰は「あー……」と言葉に詰まる。なんとも答えづらい質問だ。というか、そんなに顔にまで出るほど疲れていたのだろうか、と思って恥ずかしくなる。玲奈でイけなくても一応ひとりでしているから、溜め込みすぎてはいないつもりなんだけれど。でも、やっぱりそういうのはわかるものなんだろうか。と、そんなふうに考えた。
このところ彰は毎週のように玲奈とデート、つまりセックスをしていた。彼の年齢でそんな頻度でセックスする場所があるというのは珍しいかもしれないが、そこは一人暮しの利点だ。もともと彼は遠い集落の育ちで、別の学区に引越さないとろくに通える学校がなかった。それで実家を出て、今は学校の近くのアパートに一人で住んでいるのだが、玲奈と会う週末はそこがいわゆるヤリ部屋になった。
玲奈の方がずっと忙しくて疲れているはずなのに（ついでに言えば家もお固いはずなのに）セックスをしたがるのは決まって彼女の方だった。もちろん彼女から「しよう」などと言うことはせず、そういうときは彰から誘うことになっているのだけれど。朝のように。
はじめはよかった。すでに経験のある彰は、処女の玲奈をやさしく貫いてやることができた。美しく受身な彼女に段階を踏んで性感を教えこみ、甘い香りのする汗をかかせるのが楽しかった。彰もさほど熱心でないとはいえ運動部だから、体力に問題はないし、勃起

も充分にできた。
　しかし最近では、彼は玲奈とのセックスにほとんど満足できていなかった、玲奈のことは好きだし、はっきりとした理由は彰にはわからない。が、もしかしたら飽きたのかもしれない。自分ばかり動きつづけるのに疲れたのかもしれない。会話を引っ張ったり、ずっと上になったりすることに疲れたのかもしれない。とにかく彼は勃起してゴムを着けて、玲奈を満足させるまで動いても、一向に射精できる感じがしなかった。
　彰は毎週のセックスに付き合いながら、肝心の一番大きな快感は得られないままでいた。これはつらい悩みだし、しかも人に相談しづらい。
「なんでも話してくれていいんだよ？　大友くん」
「いや、でも……」
　彰は考えに耽り、目の前の女子を見る。赤いふちの眼鏡をかけた美弥は、彰よりも、そして玲奈よりも、背が小さくて色が白い。やや離れているとはいえ、こんなふうに同じベッドに座っているところを誰かに見られたら誤解されてしまうだろう。
　妙な雰囲気ができはじめていた。彰は唾を飲んだ。
「クラスメイトなんだからさ。悩み事があるなら放っておけないよ。あれかな、勉強のことかな。友達とか？　それとも……」

「あ、ちょっと……高橋さん？」
美弥はじりじりと、ベッドの上を彰の方に寄ってくる。彼が戸惑って何もできずにいると、彼女はその小さな手を彼の手に重ねた。
ふたりは同じベッドに座りながら、体の触れ合いそうな距離まで近づいていた。美弥がじいっと上目づかいに彰の瞳を覗きこんで言う。
「……溜まってる……とか？」
彰は言葉が出なかった。飲んでいたスポーツドリンクの甘い味を忘れ、目を見張って美弥を見つめ返す。彼女のほほ笑みが返ってくる。保健室は静かだった。遠くの運動場かどこかから、運動部のかけ声が聞える。
美弥は視線を外し、彼の顔よりずっと下の部分に目を注いだ。
彰の制服のスラックスはいつしか股間のところが大きく膨らんでいた……。